

【ポスターセッション】

AAA 多機関ケースカンファレンス・シートの開発

—有用性検証の中間報告—

○ 関東学院大学 副田あけみ (471)

長沼葉月 (首都大学東京・7246)、松本葉子 (田園調布学園大学・7934)

キーワード：多機関、ケースカンファレンス、高齢者虐待

1. 研究目的

本研究の目的は、高齢者虐待事例対応に用いる「AAA 多機関ケースカンファレンス・シート」の有用性を検証することである。

2. 研究の視点および方法

高齢者虐待事例への対応は、基本的に、複数の機関によるチームアプローチで行われる。このチームアプローチにおける重要な方法の一つがケースカンファレンスである。ケースカンファレンスが、目標共有と実施可能プランの作成、プラン実施のモニタリング・評価といったチームのパフォーマンス管理に寄与するとともに、虐待事例への対応で疲弊しがちなメンバーを支える良好な人間関係の形成・維持にも貢献できるよう、リフレクティヴ・プロセスやアンティシペーション・ダイアログ等の考え方を基盤にした、AAA 多機関ケースカンファレンス・シートというツールを開発した。

本シートの有用性評価は、①研修前質問紙調査、②研修後質問紙調査、③研修3か月後質問紙調査、④実際の事例に本シートを活用した諸機関の専門職に対する面接調査、によって行う。研修時に行なう①と②の結果から、本シートがどのような参加者にどのような点で、評価されたのかを確認する。さらに、研修参加者のなかから協力者を募り、③の調査を実施し、①と③の比較結果や④の面接調査の結果から、本シートの有用性を検証する予定である。4つの調査は今後も継続して実施するが、今回は、2016年9月から2017年3月まで全国10か所で実施した①と②の結果から明らかになった点を、中間報告として発表する。

本シート活用のケースカンファレンスを学ぶ研修は、ファシリテーションガイドを用いながら約2時間半のグループワークで実施するものである。①の質問項目は、基本属性、直近の虐待事例にかんする他機関との協働実態、他機関との協働スキル等の9問、②のそれは、研修満足度、研修の評価ポイント、シート活用意思等の4問から成る。

3. 倫理的配慮

調査研究については、関東学院大学人に関する研究倫理審査委員会の承認を得た。また、調査実施の際には、鏡文に、調査の目的、分析方法、匿名性保持の方法、調査協力は任意であること、回答をもって調査協力に同意したものとみなすことなどを明記した。

4. 研究結果

集計対象としたのは、①の 327、②の 326 のサンプルである。直近の虐待事例に対する他機関との協働実態にかんする質問群（12 項目、5 件法）を因子分析し（プロマックス回転）、2 因子を抽出した（因子間相関 0.682）。因子 1 を「パフォーマンス管理」、因子 2 を「良好な人間関係維持」と名付け、それぞれの因子ごとの合成変数を作成した（得点が高いほど、チームワークでよい経験をしていることを示す）。同様に、他機関とのコミュニケーション・スキルにかんする質問群（12 項目、5 件法）を因子分析したところ（プロマックス回転）、2 因子を抽出した（因子間相関 0.478）。因子 1 を「ダイアログ型コミュニケーション・スキル」、因子 2 を「非ダイアログ型コミュニケーション・スキル」と名付け、それぞれの因子ごとの合成変数を作成した（得点が高い程そのスキルを良く使うことを示す）。「ダイアログ型コミュニケーション・スキル」は、「パフォーマンス管理」と「良好な人間関係維持」との有意な正の相関が、「非ダイアログ型コミュニケーション・スキル」はこれら 2 つと負の相関が見られた。

本シートによるケースカンファレンス研修にかんする全体の満足度の平均点は 22.6 点（最低点 7～最高点 28 点）と概ね良好であった。「パフォーマンス管理」の得点が高い人は、研修満足度も高いという相関がみられたが、コミュニケーション・スキルのタイプによる違いは見られなかった。本シートで評価できる点を、印象に残った点として 7 つの選択肢を複数回答で選んでもらったところ、全体では、「安全像を多様な視点から描き出すこと（安全像）」（71.0%）と「安全到達度についてそれぞれが点をつけ、その根拠を話し合うこと（安全到達度）」（73.2%）の 2 つがもっとも多かった。この 2 点と、「今後の取り組みアイデアをあげ、その見通しについて話し合うこと（アイデアと見通し）」（43.8%）は、本シート活用のケースカンファレンスにおいて、パフォーマンス管理とメンバー間のコミュニケーションを促進する中核的なパートである。「ダイアログ型コミュニケーション・スキル」の得点の高い人は、この「安全像」と「安全到達度」を、「パフォーマンス管理」の得点の高い人は、「アイデアと見通し」を高く評価していた（有意差あり）。本シートを実際に「さっそく使ってみよう」と回答した人は全体では 19%にとどまったが、「非ダイアログ型コミュニケーション・スキル」の高い人は負の相関が強かった。

5. 考察

以上の結果から、「パフォーマンス管理」に関してよい経験を重ねている人たち、また、「ダイアログ型コミュニケーション・スキル」の得点の高い人たちが、本シート活用のケースカンファレンスのねらいをよりよく理解し、評価していることがわかった。このことから、彼らが本研修によって自信をつけ、一層、質の高いチームアプローチを実践することが期待される。他方、「パフォーマンス管理」であまり良い経験を重ねておらず、また、チーム内でコミュニケーションの課題を抱えて話し合うのをあきらめがちな人たちに、シートのねらいを理解し、それを実践に活かしてもらうための効果的な研修方法を検討することが課題である。